

# 駒場友の会

## 会報 第五号



### 新年を迎えて

本間 長世

新年にあたり、会員・会友の皆様のご健勝と御多幸をお祈り申し上げます。

今年が、駒場友の会にとって一層の発展の年となることを念じております。

国立大学法人となった東京大学の中で、駒場キャンパスの皆さんも大いなる試練に面しておられるわけであり、友の会が意味のある支援を強めて行けるよう力を出し合いたいものです。

これからの高等教育はいかにあるべきかという問題は、日本だけのものではありません。『アメリカン・スカラー』という季刊誌は、文学、科学、文化にわたって一九三〇年代初めから出版されているハイブライナ雑誌ですが、昨年の秋季号に、編集長がアメリカの大学事情について短い記事を書いているのが目にとまりました。

その記事は、まず他の雑誌に書かれている文章を紹介しています。その筆者は最近ハーヴァード大学を卒業した体験から、ひとたびハーヴァードに入学してしまうと、人文科学専攻の学生は熱心に勉強せ

ず大して学ぶことをせず四年間を過ごすこと、楽に卒業できると述べているというのです。

『アメリカン・スカラー』の編集長が特に注目したのは、その卒業生が、ハーヴァードがリベラル・エデュケーションとは何であるかを定義しながら、学生に対して広く学ぶことを真剣に求めないと指摘している点でした。ハーヴァードでの必修科目群は、恐ろしく細かく、挑戦的に難解な題目を並べているという感想に編集長は同情的です。というのも、編集長の息子が、ハーヴァードではありませんがどこかの大学に入学して、指導教授と相談した結果、ジャズと、映画と、天文学と、作文と、哲学とを受講することになったのですが、息子はこの中の哲学は受けないことにしようと考えているからです。父親としては、まず哲学を勉強して、それから映画を学んだらよからうということなのですが、結局どうなったかは書いてありません。



第1回 駒場友の会講演会 「雄弁について」  
2005年12月3日 東京大学教養学部・学際交流ホール  
講演会でお話される本間長世先生

ハーヴァード大学側にはきちんとした教育方針があるはずで、一卒業生の話だけを紹介するのは不適切でしょうが、このエピソードにはリベラル・エデュケーションという概念の崩壊——というのが強すぎるのであれば混乱——が象徴されているように思われます。そしてこの話は、日本にとっても他人事ではないような気がします。

私は教育の現場から離れてすでに何年もたっているのですが、今日の日本の高等教育について具体的に論ずることはできません。しかし、一方において企業を先頭とする社会の側が大学生に卒業後の即戦力——意味不明のことばですが——を求め、他方では高校からさらに中学校にまで下って将来のキャリアのための進学指導を行なうというような状況が強まれば、リベラル・エデュケーションの美点は失われてしまふでしょう。

駒場における教育は、真に「善く生きる」ためのものであり続けて欲しいと願っております。新しい時代に即応したりベラル・エデュケーションは、駒場でこそ実践されるべきだと信じます。

(駒場友の会会長)

### 英語の授業の思い出

行方昭夫

もう半世紀以上前になる私の教養学科時代の英語の授業の思い出を語るとなると、これは英語教育の歴史的な資料となろうが、あくまで私個人の経験であるのを、お断りしておく。「教養学科でなら訳読以外の英語が学べる」という学生間の噂が真実だと実感したのは、羽柴正市先生の英語の授業が最初であり、もっとも強烈なインパクトを受けた。ある曜日の午後、颯爽と教室に入って来られた先生は、滑らか

な英語で “Good afternoon, everyone!”とおっしゃり、出席者全員に軽く会釈された。あつげにとられた進学生は押し黙ったままだったが、先輩のなかには “Good afternoon, sir!” と答える者もいた。

先生は、挨拶の後も英語のまま話された。英作文を主にやり、それも和文英訳よりも、課題を与えた自由英作文をやると言われた。最初の時間なので、英作文習の際の注意点を話すと言われ、日本語をそのまま直訳するのではなく、英語らしい論理に言い換えてから訳すように言われた。それから、好きな英文を自分で日本語に直しておき、数日後に英語に訳し、それを原文と較べて訂正するという “retranslating” の勉強法を説かれた。私が、そのやり方で勉強すれば、向上するかな、と感心していると、「まあ、実際にやると大変だから、実行はまず無理だね」という趣旨のことを付言されて、にやつと笑みを浮かべられた。私はそこに人間味豊かさを感じ取り、先生に惚れ込んだ。この授業では、皆で英訳する問題を持ち寄ったときに、小和田恒君が「自由を得たのだからといって、信号を無視して道路を歩くソ連の老婦人」の挿話を持参したのを覚えている。いい問題だったから。

主流であった英文講読の授業では、上田勤先生の『フォースター』インドへの道』と朱牟田夏雄先生の『バトラ』『万人の道』が実に印象的であった。「英語は外国語だから、とことんまでは分からなくても仕方ない」と思っていた僕に反省を強いられた。両先生とも、抜群の解釈力を発揮され、きちんと読めば外国語でもこんな鮮明に意味がわかる、著者の心理にまで肉薄できるのだ、と教えてくださった。学生があまり考えずに、ただ原文の字面を追うだけの訳し方をすると、必ず「どういう意味かね？」と鋭く尋ねられた。両先生にすっかり感銘した私は、自分が当たっていない箇所まで予習して授業に臨むようになり、授業

を充分に楽しむことができた。

佐山栄太郎先生の日本文学英訳の授業は、漱石と直哉の文章一頁を毎回英訳するというものであった。二〇人の学生の答案を添削し、コメントまで添えるというのは、さぞ大変だったに違いない。最大限の努力をしたが、毎回よく訂正された。ある時 “What a happy expression!” とコメントして頂き、感激した。漱石は訳しいいのに、直哉は英語にならないので、「こんな非論理的な文章は訳せません」と学生が文句を言ったら、「でも日本文としては立派だよ」と言われ、和文英訳には、原文を英語の論理で書き直す作業が避けられないと落ち着いた口調で説かれた。先生の訳例は原文に離れずに、立派な英語になっていた。

今振り返ってみると、いずれの先生も英語の達人であり、学生の英語力の向上に常に心を砕いていらした。旧式な英語教育方法なのかもしれないが、少なくとも私には極めて有効であったと証言する。

(イギリス科3期生)



♪演奏するユリア・チャプリーナさん♪  
素晴らしい演奏で聴衆を魅了 大好評でした

ユリア・チャプリーナ ピアノリサイタル  
二〇〇五年十一月三日 数理科学研究科棟大講義室

東京大学ホームカミングデイ@駒場  
「駒場の樹木をめぐる講演会とイベント」  
二〇〇五年十一月十九日



駒場の自然に親しむ会 講演

梶先生「樹木に親しむための二・三の心得」  
箸本先生「イチョウを観て池野成一郎博士を偲ぶ」  
講演終了後、梶先生の引率で散策しながら、構内の樹木にネームプレートを付ける参加者。

第二回駒場友の会講演会

二〇〇五年十二月二十日 学際交流ホール



辻亨氏(丸紅会長)「総合商社の経営と囲碁」  
講師には教養学部の全学自由研究ゼミナールにご協力いただいています。会場からは熱心な質問も多くあり、活発な質疑応答がなされました。また、プロ棋士 石倉昇氏(本学卒業生)の興味深いお話も伺えました。

## 科学技術インタープリター

### 養成プログラムと顔の見える科学技術

大西 隼

目を覚ましてから、眠りに就くまで、私たちの生活は科学技術なしではあり得ないだろう。衣食住はもちろん、車や電車なくして都市の機能は成り立たないし、生産、流通、通信など、ありとあらゆる場面で、現代人の生活は科学技術の恩恵にあずかっている。これらの事は、今更言うまでもないほど当然のように思われ、殊更に気に留めずとも、日常の生活に支障はない。

しかし、近年、社会と科学技術の間の齟齬が問題になり始めてきた。高度成長期の目に見える明らかな公害問題などと異なり、現在生じている問題の多くは、目に見えにくい問題だ。狂牛病、原子力発電、葉書エイズ、遺伝子組み換え食品などである。科学技術はインターネットをはじめ、数多くの便利さを生み出したが、一方で決して看過できない問題が増大しつつあるのも事実だろう。

「社会」の側に属していると思いついでいる人々が、実は本当に属しているのは「科学技術社会」であり、目に見えにくい問題が契機となり社会の中に「科学」が立ち現れると、市民はその扱いに戸惑うのだろうか。なぜ市民は、科学技術の総体に対して、常に曖昧模糊とした不安を覚えるのだろうか。その主因として挙げられるのは、科学技術には「顔」が見えにくい、ということだろう。人々が知りたいのは、科学技術を、一体どこに誰が、どういった根拠で動かしているかということである。国や企業や大学といった「権威」ではなく、科学技術に携わる「生身の」人間が市民の目に触れることは稀である。先年ノーベル賞を受賞

された田中耕一さんを取り巻く一連のマスコミの過剰な報道などは、社会側の望ましい反応とは言いが難かったが、あらためて認識させられたのは、人々の「生身の」科学者への興味の強さであった。

科学と社会の乖離、市民の科学リテラシー低下、理科離れ等の背景の中、本年度から大学院生の副専攻として「科学技術インタープリター養成プログラム」が、JSTの科学技術振興調整費をもとに作られることになった。このプログラムは東京大学全体のものであるが、総合文化研究科に設置された。

私は本専攻では、筋強直性ジストロフィーの分子機構の解明をテーマとして研究しているが、十月からは本プログラムが開講し、それまでに比べて二倍の多忙な日々が始まった。

プログラムの大きな特徴の一つは、多彩な講師陣である。プログラムに参加されている本学の教授陣は社会的にも著名な方が多く、そうそうたる顔ぶれである。それに加え学外からも、ジャーナリスト、作家、新聞記者、NHKプロデューサー、NPO代表、アーティストなど、各分野で大活躍されている一流の講師陣が実践的な知識を伝えてくださる。

充実した多くの講義から、ただ単に知識を吸収するだけでは意味がない。過去の事例・知識の蓄積を土台とし、更に将来に向け発展的な議論を重ねる中で、より成熟した科学と社会の間の通訳・解釈者となることを目指し、本専攻と副専攻に日々精進している。

本プログラム第一期生である十四人の学生は皆、本専攻でも研究を行なっており、各人の研究内容も将来像も十人十色であるが、社会の中の科学技術に対して強い問題意識を持っている各学生のバックグラウンドの多様さは、科学・社会に関する議論の発展の原動力となっている。そのみならず、共に過ごした日はまだ浅いが、尊敬すべき学友に出会うことができ

たことが今後の人生の宝の一つとなるだろうと、私は感じている。

(大学院理学系研究科博士課程一年)

## 駒場という「異郷」

ラクエル・ヒル

様々な文化が混交するアラスカ州で約十年間を過ごした大庭みな子は、あるエッセイで、その地が「青春を埋めた」異郷の故郷だと語っている。今年「駒場」十年を迎える私にとって、胸に深く響く言葉である。駒場キャンパスの銀杏並木が黄色く色づき始めた一九九六年の秋に、東京大学の国際化におおいに貢献している短期交換留学プログラムAIKOMの参加者として、季節は正反対、言葉も異なるニューヨークランドのオタゴ大学から私は日本にやってきたのだった。一年足らずの滞在予定だった当時、その後十年もの時間を駒場キャンパスで過ごし、日本語で博士論文を書き上げるようになるとは夢にも思わなかった。

博士論文では、大庭みな子とジャーネット・フレイムという、それぞれ日本とニューヨークランドを代表する女性作家の作品を、ディスプレイスメント(広義では故郷もしくは居場所の喪失感という切り口から比較考察した。日本に暮せば暮すほど、自らの「故郷」がどこにあるのかわからなくなつてゆく私は、まさにこのようなディスプレイスメントの過程が叙情的に描かれている大庭とフレイムの文学に魅せられた。外国に長く住んだことのある者なら、きっと同じディスプレイスメントに直面するに違いない。生まれ育った地は、乳白色の霧の向こうでかすかに一瞬光っては消えてゆく幻のような存在になる。そして、逆に、自分が住み着いた「異郷」であるはずの場所は、「異郷」——単な

る他国ではなく、異国の故郷——に変貌するのである。駒場は、まさしく私が異国で見つけた故郷なのだ。駒場キャンパスは、都心とは思えないほどの豊かな自然環境の中で勉強ができるごちんまりした雰囲気がある。その一方で、駒場は単なるうわべの意味においてではない「国際化」が、深く広く浸透している場所でもある。十六カ国の二十四大学と交換協定を結んでいるAIKOMプログラムを含め、駒場キャンパスは世界地図の縮小版ともいえる特別で豊かな時間空間を創っている。授業で学んだことは別として、私が誇りに思っているものは、様々な国の学生——アメリカ人、イギリス人、インドネシア人、ウクライナ人、オーストラリア人、韓国人、シンガポール人、台湾人、チリ人、中国人、日本人、ブルガリア人、ミャンマー人——と駒場で築いた友情にほかならない。駒場は、文化や言語の違いを超え、「国家」という概念を超越しようとする異郷となり、そこで私たちはそのような場所においてのみ可能となる「共通の言葉」のようなものにたどり着こうとしている気がする。

大庭みな子は、故郷の喪失の物語として浦島太郎の伝説に殊の外思い入れがあり、いくつかの作品の中でこの比喻を用いている。龍宮城で夢のような暮らしを経験した浦島太郎であったが、やがて故郷が恋しくなり、玉手箱を胸に抱えて村に帰ってしまう。しかし、思い描いた場所はもはや存在しない。そして、絶望のあまり、玉手箱を開けてしまう……。駒場は私にとって龍宮城のような、夢のような異郷である。そこでまさに私は自分の青春を埋めたのだ。去年の暮れに博士論文を提出し、もうすぐ駒場を去る時が訪れる。そして、駒場を出て、新たな旅に出かける私にも玉手箱が託されている。しかし、その玉手箱の中には決して失望が秘められているのではない。そこには、駒場で得た、駒場がくれた、知恵と友情と成長と

いう、大切な、大切な宝物がぎっしり詰まっているのである。(大学院超域文化科学専攻比較文学比較文化コース 二〇〇四年修了 神奈川大学特任講師)

**東京大学駒場博物館展覧会情報**  
**美術博物館所蔵品展**  
 一高・東高コレクション展Ⅱ—旧制高校と入学試験  
 レオナルド・ダ・ヴィンチの複製素描画Ⅳ  
 会期: 2006年1月23日(月)~3月10日(金)  
**江戸の声 黒木文庫でみる音楽と演劇の世界**  
 会期: 2006年3月27日(月)~5月7日(日)  
 問合せ: 電話03-5454-6139

**第107回オルガン演奏会**  
 2006年4月27日(木) 18時30分  
 オルガン: Maurice Clerc  
 国際的に著名なフランス人奏者 1946年生まれ  
 オルガン委員会URL <http://organ.c.u-tokyo.ac.jp/>



2005年ギャラリートーク  
 写真上 加藤先生「バウハウスの建築について」  
 写真下 池田先生「バウハウス 創造の奇跡」

編集後記

あけましておめでとうございます。

昨年の文化の日、ロシアの若いピアニスト、ユリヤ・チャプリナさんをお迎えしてのコンサートは数理の大講義室が満員の盛況で、演奏後も学生を含めた聴衆との話の輪ができ、友の会の行事は幸先のよいスタートをきることができました。ホーム・カミングデーには、駒場の自然に親しむ会として、本学秩父演習林の梶先生、本学部着本先生のお

駒場友の会会報 第五号

平成十八年一月十二日発行

発行人 高橋 宗五  
 駒場友の会事務局

〒一五三—八九〇二 目黒区駒場三—八一—

電話 〇三—三四六七—三三三六

メールアドレス info@tomocampo@adm.c.u-tokyo.ac.jp

ホームページアドレス

<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/~ilovekomaba/>

カジュアルフレンチが評判の  
 カフェ感覚のレストラン  
**ルヴェゾンヴェール  
 駒場**

駒場友の会会員・会友の皆様がお食事の際  
 ご注文なされたコーヒーは、お会計時に会  
 員・会友証をご提示下さいますと無料に  
 なります。

営業時間: 11:00~14:30; 17:00~21:00  
 Tel: 03-5790-5931/Fax: 03-5790-1902  
 駒場ファカルティハウス 1階

話と樹木にプレートをつけるイベント、十二月には二つの講演会、本間長世会長の「雄弁について」、辻亨丸紅会長の「総合商社の経営と囲碁」を開催いたしました。  
 また、日本におけるドイツ年特別展示「デッサウ・バウハウスとブルク・ギービツヘンシュタイン大学展」と、三回のギャラリートーク(十一月五日パウルクレー協会新藤信氏、十二日、本学部加藤道夫教授、二十六日、同じく池田信雄教授)を開催しました。  
 本年も皆様のご期待にそえるような催しを企画したいと思えます。一昨年春誕生したばかりのこの会を、どうぞご支援下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。(龍)